

市報 松江

1

January

特集 「こどもまんなかアクション」
リレーシンポジウムin松江



小泉八雲とセツが出会ったまち 松江



おまっちゃん「八重垣神社」をお参り

2026年 令和8年 Vol.250

MATSUE

「こどもまんなかアクション」 リレーシンポジウム in松江

地域で育む「こどもまんなか社会」
～「MATSUE DREAMS 2030」を子育て世代とつなぐ～



11月19日を松江の「子育ての日」とし、まち全体で子育てを応援します

松江市では、すべてのこども・若者のみなさんが幸せに生活を送り、自分に関係することに意見を伝えることができる「#こどもまんなか松江」の実現に向けて取り組んでいます。そのひとつとして、令和7年11月9日に、島根県立大学にて、今年で3回目となる「子育ての日ファミリーイベント」を開催しました。

今回のイベントでは、こどもや子育て世代にやさしい社会づくりを進めるため、こども家庭庁が全国で実施する「こどもまんなかアクションリレーシンポジウム」が同時開催されました。その一部をご紹介します。

登壇者のプロフィール



こども家庭庁
成育局成育環境課長
安里 賀奈子 氏

平成12年厚生省(現 厚生労働省)入省。その後、雇用均等・児童家庭局保育課、大臣官房総務課、職業能力開発局総務課、健康局総務課がん対策推進課などを経て現職。

ファシリテーター



島根県立大学副学長
岩田 英作 教授

専門分野は、日本近代文学・児童文学。絵本専門図書館「おはなしレストランライブラリー」を拠点とした絵本の読み聞かせ活動に取り組む。



てい先生

現役の保育士でありながらSNSの総フォロワー数200万人を越え幅広い分野で活躍。その具体的な育児法は斬新なアイデアにあふれ、ママパパに圧倒的に支持されている。

ゲスト



ひろみちお兄さん

NHK教育番組「おかあさんといっしょ」第10代体操のお兄さん。全国で親子体操教室、指導者研修会、講演会など教育活動に幅広く活躍中。

テーマ1

こどもの『非認知能力』を育む、 松江ならではの遊び場・環境とは？

岩田 実は正直なところ、『非認知能力』という言葉を理解していませんでした。例えば学校の勉強のように数字や成績で計れるようなものではない、そういう能力を総称しているという理解でよろしいでしょうか？

てい先生 総称すると、多分『生きる力』みたいな話だと思うんです。松江みたいな場所って、非認知能力を育てるのに適している場所だと思います。なぜかと言うと、僕が先ほど言った生きる力を少し説きほどこしていくと予定調和ではない、体験経験の積み重ねっていう風に僕は思っているんです。予定調和をこどもたちに落とし込んでみると、やっぱり松江みたいな自然豊かな場所っていうことだと思えます。例えば部屋の中などでも非認知能力を伸ばすことは可能だと思いますが、やっぱり外に出ると予定調和ではないことってたくさん起きますよね。砂場で遊んでいる時に水を山から流そうと思ったら全然違う方に流れていっちゃったとか。そういう予定調和ではないことが起きた時に、じゃあどうしようかって。その『どうしようか』も解決する方向で進む場合もあれば、水がこっちに流れていっちゃった、予定とは違うけど、それはそれで面白いじゃんという方に行くのも僕は生きる力、楽しめる力だと思います。最近、ゲームでこどもの能力を伸ばせます、みたいな主張をよく見かけていて、もちろんそういう面もあるかもしれないですが、やっぱり外に出ないと培えないものが予定調和ではない経験の貴重さだと思います。

佐藤 非認知能力は、目に見えない、数値にも表せないということで運動面から言うところ『感覚』だと思っています。例えば、皆さんここまで歩いてきたと思います。小さい頃から積み重ねて歩くという能力を勝手に身につけて何も考えずに歩いていますよね。これも非認知能力だと思うんです。そういった自分たちで実体験を繰り返すことによって歩くという能力が勝手に身についたり。刃物を持った人がいる、逃げなきゃっていうときの距離感もそう。いろんなところで感覚っていうものがあるんです。いろんなところで非認知能力につながってくるんじゃないかなって思いながらこどもたちに伝えていきます。日頃からの運動遊びの積み重ねで勝手に自分の体を守れる。みんながダンゴムシやりましようって言いながらゴロンとして起き上がったたり、その積み重ねで自然と転んだ時にコロンと背中を丸くして頭を守れるとか。そういうのも全部実体験の積み重ねの感覚の入れ方だと思おうので、僕はそういう風に思いながら運動遊びの指導をしています。

岩田 遊んだ時にはたまには擦り傷とかできるけど、それも経験のうちですね。

佐藤 小さい怪我は大きな怪我の予防だと思っています。今、いきなり骨折することもありますが。そういうこどもは人との距離感とか感覚が身についていないから大きな怪我に繋がっていくんじゃないかなって思っています。

市長 私たちの親の世代は、宍道湖や中海で泳いだり釣りをしたりして遊んでいたんです。でも、こどもの頃の私にとって宍道湖は、『遊び場』ではなく『夕日が綺麗な写真映えスポット』でした。そこで今、宍道湖を『遊び場』にする計画を進めています。その一環として、宍道湖の南岸から嫁ヶ島まで歩いて渡れるイベントを年1回開催しているんです。こどもたちは、浮き輪をつけ手綱を引っ張って渡りながら、宍道湖の深さや湖畔

の生き物を知ることができます。宍道湖の北側では、国土交通省とともに『ちやぶちやぶ広場』の造成を進めています。『ちやぶちやぶ』できる親水空間を作って、浅瀬に寝そべったり水鉄砲で遊んだり魚や貝を捕まえたり、宍道湖を『遊び場』として使い倒して欲しいんです。

そうした経験を経て、松江に育ててもらったなあという思いが培われ、自分のこどももここで育てたいとか、育ててもらった松江に恩返ししたいといった気持ち芽生えるのではないかと思います。故郷に誇りを抱くことが定住やリターンを促進し、人口減少に歯止めをかけることにもつながると確信しています。

また、松江を良くしたいという志やチャレンジ精神を持つ地元出身者が集まれば、『松江なら新しいことにトライできる』という風土が生まれ、もともと縁のなかった人もこの地を目指してくれるのではないかと。これからは、こどもたちが『誇れるまち』『夢を実現できるまち』を目指して取り組んでいきます。

安里 非認知能力ということにかけて言えば、机に座っての勉強以外の体験をすること、世界が広がるなと思います。その体験は自然の中での1人の体験もあるでしょうし、人と人との関係もあると思います。色々行ける場所があつて居場所の数が多い方が、自己肯定感も高かったり、将来に対する希望を持っている人の割合が高いというデータがあります。家が居場所だからいいじゃないか、学校が居場所だからいいじゃないかではな

テーマ2

子育ての『孤立』を防ぐために、地域 と行政が手を取り合うには？

岩田 核家族化が進行してアパートやマンションといった集合住宅系で、隣には誰が住んでいるのかよくわからない中で、インター

く、家にも学校にも居場所があつて、さらに地域にも居場所がある方がメンタルの安定にもつながっているということが見えてきているので、幸せになる力を育む意味でも、こども家庭庁は、居場所づくりを頑張っています。従来型の居場所だと行政が建物建てました、で終わりにしちゃうと思うんですけど、地域でこども会をやっているとか身近な公園で時々誰かがイベントをしてってくれたりとか。ちやぶちやぶ広場も、もしかしら行ったら常に誰かが居て、そこでお話ができるってなったら100点満点だと思います。市長がおっしゃったように、地域に愛着を持って人がいいたら、その地域が元気になっていくっていうのが見えるんですよね。で、愛着を育むためにも、その愛着を感じるような場所があると、地域への愛が育まれていくと思うので、ちやぶちやぶ広場づくりは正解の事業だと思っています。



ネットに頼って子育てしている人がいるかもしれないですね。

てい先生 こういうテーマを掲げた際に、解決策として出てきやすいのが、人との繋がりを持たせようっていう、こればっかりになるんですけど、僕はこれ正直半分間違っていると思っています。人が居ればいいのではなく、「共感してくれる人がいるかどうか」が重要だと思うからです。例えば、家で旦那さんが子育てしてくれるかもしれない、手伝ってくれるとか家事もやってくれるかもしれない。だけど、最近うちの子、○○なんだよねっていうママの悩みを旦那さんにぶつけた時に、共感するんじゃないかって、こうすればいいじゃんってアドバイスベースで全部返してきたりすると、結局相談したママの孤立感ばかり目の前に人があるにも関わらず消えてないわけですよ。この手の話題は、ゴールが『人との繋がりを作りましょう』、『インターネット上でも誰でもいいから話せる人を作りましょう』って話になるんだけど、そうではなくて、必要なのは自分に寄り添ってくれるかどうかであって、そこを履き違えてしまうと危険かなと思います。



安里 本当にその通りです。うまくいっているところは、居場所を開いてる人に思いがあつて、ちゃんとスタッフにその思いが共有されていると、安心して『共感してもらえる人がある場所』になるんですけど。

市長 自分1人だけで解決できることは多くないので、得意な人に解決策を求めたり、行政が必要なサービスを提供することも重要です。特に松江市が、市民の皆さんの「子育て」を応援するにあたって力を入れているのがデジタル技術の活用です。例えば、LINEで友達になるだけで24時間365日、子育てに関する悩みに応えてくれる「まつえの子育てAIコンシェルジュ」を無料で提供しています。3千人を超える方が登録されていて、子育てに関する困りごとや悩み相談を受け付けています。

また、令和5年から保育所の入所申し込みをオンラインでも実施できるようにしました。従来は、保護者の皆さんに市役所まで足を運んでもらい、申込用紙に第5希望まで保育所名を記入していただき、それを市役所職員が1件1件空いている保育所とマッチングするの7日間かかっていました。それをAIが担うことで、なんと10秒でマッチングできるようになりました。すでに約53%の保護者の方が、オンラインの「スマート申請」で入所申し込みをされています。



松江市の子育てイメージキャラクター「しじみちゃん」

と比べれば対応件数が9割増え、ヤングケアラーやこどもの貧困の問題などが見つけやすくなっています。

これからも、市民の皆さんにニーズをお聞きしたうえで、日々子育て支援策のバージョンアップを図っていきたいと考えています。



佐藤 素晴らしいですね。やっぱり不安材料が減るっていうのは、そのまちに住んでいる方にとっては嬉しいことでしょう。ただ孤立している人は、多分頑張りが過ぎている人だと思っんですよね。だからそういう人たちに周りに頼っていいんだよ、子育ても1人でなくていいんだよって声がけをするだけで随分肩の荷も楽になると思います。

安里 今皆さんの話を聞いて、希望が持てる話を思い出しました。これはお年寄りの孤立対策に関して聞いた話なんですけど、近所で挨拶している関係だけでも和らぐんですって。ドイツは面白くて、スーパの力ゴを2種類にして、そのひとつを『おしゃべりOKかご』っていうのを作って。おしゃべりした人はそれを持って入ると、持ってる人同士もおしゃべりをするし、レジで店員も話しかけるし、ゆっくりおしゃべりしながら買い物をする。すると、その地域のお年寄りの幸福度が上がったらしいんです。地域で声をかけ合う、簡単なことでもきつと孤立対策に効くと思います。ちゃんとDX化、AI化して楽にできるところはそうして、でも、どっぷり関わりたい人にはちゃんと関わって対面でできる場所がある。松江市のこのかけ合わせがとてもいいと思います。

テーマ3

こどもたちが『夢』を抱き、育むために、大人にできること、松江市にできることは？

岩田 こども家庭庁は、こどもの夢応援庁でもあると思うのですが。

安里 こどもの意見を聞くというか、こどもが意見を言う機会を提供するってことが、

『こどもまんなか』の基礎ですよっていうことなんですね。それって、こどもたちが夢を見つけることにもなるかもしれないし。日本は残念ながら、こどもの自殺率も高いんですけど、将来に夢があれば生きようとする選択肢も強くなってくると思うんです。自分の意見を言うことができて、誰かがそれをサポートしてくれて、実現したっていう成功体験、そういうことを幼いうちから繰り返すことで、自分の夢は叶えられるって思うことが一番こどもにプレゼンしたいことだなっていう風に思ってます。

市長 松江市は市政を進める道標として、総合計画「MATSUE DREAMS 2030」を策定して、『夢を実現できるまち 誇れるまち 松江』の創造を目標に日々取り組んでいます。

このうち「夢を実現できるまち」は、松江なら夢を叶えられる、だれでもここでチャレンジできるということ。「誇れるまち」は、魅力的な松江に生まれ育ち暮らすことに胸を張って自慢しよう！ということなんです。

また、こども・子育て支援の目標としては、市民の皆さんが「ここに生まれて良かった」ことで育てて良かった」と感じられることを掲げて、ふるさと学習に力を入れています。松江市立小学校の3年生は、宍道湖でシジミ漁が体験できます。小学6年生には『松江城授業プロジェクト』という必修授業があって、松江城の謎や秘密に触れながら天守まで登り、松江歴史館で悠久の歴史を学びます。今年1月には初めて、中学2年生を対象とする職業体験イベント『MATSUE WAKU WORK』を開催しました。事後アンケートでは、『自分の夢が見つかった』と書いてくれた生徒もいました。

やりたいことが見つかったあと、その実現に向けて努力できる場所となるため、チャレンジを応援する仕組みも設けています。令和5年にスタートした「MATSUE起業エコシステム」は、新しいアイデアをもった人をみんなで後押しして、事業化・ビジネス化を図る「応援団」です。今はそれが官から民に広

がると同時に、大人からこどもへと広がっているんです。例えば、社会課題を解決するアイデアを持つ高校生に対して、大人たちが助言し資金も提供して事業化をサポートしています。松江のこどもたちが考えたアイデアは、アイデアでは終わらせません。自分の夢として叶えていくのを全力で応援します。主役は、夢に向かってチャレンジするすべての人です。行政は最初は先頭で旗を振っていますが、途中で後ろに回り込んで、最後は後ろからうちわで風を送るような存在でいたいですね。



佐藤 夢を持つことと自体が自分自身を奮い立たせることにもなってきます。僕も親子体操を通じて世の中を健康にしていきたいです。今は青森県の弘前大学の大学院で親子体操を研究して学位を取って、日本初の親子体操博士として活動させてもらっているんですけど、青森県って47都道府県中平均寿命が40年ぐらいいずっと1番低いんです。それをなんとか親子体操を通じて若い世代から健康に向ける意識を高めて平均寿命を高めていきたいなっていうのがあるんですけど、僕が学位を取ってから10年ぐらいいちがいますが、まだずっと平均寿命が47位なんです。でもこの10年で健康寿命が上がってきてるんです。なので、あと数年かければもしかしたら短寿命県脱ができる

かなっていうところを目指しながら、自分の夢と重ねて、親子体操っていうものは本当に体にいいんだよ、ということを通して世の中に広めていきたいと思って活動しています。こどもたちに夢を持たせる時って、なんか目の前の夢もそうなんですけど、地球儀を見るともっと夢が広がるよっていう風に言われて、幅広い大きな夢をもっともって見せられるような大人になりたいなと思っています。

てい先生 大人もそうだと思うんですけど、大きな目標や大きな夢を持つ時って、そもそも自分が大事にされているっていう感覚がないと、持つものも持てない、持てるものも持てないと思うんです。その大事にされている感覚っていうのが、例えばこども基本法であつたりとか、こども家庭庁の100ヶ月ビジョンとかもそうだと思うんですが、分かんないんですよ。具体的にどういうことなのかっていうのを大人で照らし合わせた方が分かりやすいと思っています。例えば、ここに水があります。じゃあ市長さんにそこのお水取っていただきたいと思つたと思います。普通大人同士の常識的なコミュニケーションとしては、まず市長さんの様子を観察して取れそうだなって判断したらそこで初めて「ちよつとすいません。そこのお水取っていただけますか？」となりますが、相手がこどもになった途端に、大人ってそれができないことが多々あつて。例えば、もうすぐお昼ご飯なのでそろそろこどもに片付けしてほしいなって思つたとき、こどもの様子を見ずに時計だけ見て、「もうご飯だから片付けして」って始まるんですよ。それでも片付けをしないと、「ねえさつき言つたよ。もういい加減にしないよ。パパが帰ってきたら怒つてもらうからね」とか。僕たちは当たり前のようにこどもにそれをやっているんです。そんな言われ方をして、こどもが片付けたいと思うのかっていう話なんです。そうなのよってまさに大事にされていない感覚が大人の無意識の行動によって植え付けられている可能性があるのが大きなこども基本法とか、こどもの意見を聞きましよう、みた

いなざつくりしたことを皆さんに伝えたいのではなくって、そういう日常の中にある細かい部分を皆さんの生活の中と、こども家庭庁が発していることをご自身の中ですり合わせどんなことかなって考えていくことがまず大事なこともなんじゃないかなっていう風に思います。

安里 こども家庭庁が『こどもまんなか』って謳っていることは、大人にやっているのと同じ対応をこどもでもやろうよってことなんです。幼いこどもでも声を聴くことが大切なんです。大人とこどもが対等に声を聴き、会話をすると、それが当たり前になったこどもは誰に対してもそうやって接触しますよね。だから、『こどもまんなか』の概念って、きつと日本を良くする方に変えるなっていると思います。

市長 重要なのは『実行すること』ですね。目標を立てるだけじゃなくて、一歩を踏み出すこと。踏み出せば、夢の実現は間違いなくこちらに近づいてきます。皆さんにご意見をいただながら、松江市がより魅力的な『夢を実現できるまち』になるように、これから力を尽くしてまいります。



まつえこども
子育てサイト



まつえの子育て
AIコンシェルジュ



こども家庭庁
100か月ビジョン